

津軽方言の「ウマル」「ヌガル」

佐藤正幸

第1章 はじめに

津軽方言において、雪やとても柔らかい土の上を歩いて、めり込むことを表わす時に、動詞「ウマル」「ヌガル」を使う(注1)。例えば、

(1) ユキサ ウマッテ アサガエネ。(雪に足がうまって歩けない。)

(2) ユキサ ヌガッテ アサガエネ。(雪に足が取られて歩けない。)

は、現象としてともに春の柔らかい雪に足がめり込み、歩きにくいことを表わしている。しかし、深い雪のなかに姿かたちが見えなくなるほどめり込んだ場合には、

(3) ユキノ ナガサ ウマッテ スガダ ミエネ。

(雪のなかにうもれてしまって、姿が見えない。)

(4) * ユキノ ナガサ ヌガッテ スガダ ミエネ。

というように、使い分けがある。

また、「ウマル」「ヌガル」は構文の観点からも以下のような違いを持つ。

まず、「ヌガル」がどのような構文で用いられるかをみってみる。

(6) アノフト ヨグ ユキサ ヌガル。(あの人はよく雪に足を取られる。)

(7) ドロサ ヌガッテ ウゴゲネ。(泥に足を取られて動けない。)

(8) コノタ ヌガル。(この田んぼはぬかる。)

(9) ユギデ ケツド ヌガル。(雪で道がぬかる。)

上の例から、「ヌガル」は次の構文で用いられることがわかる。

(10) NP₁ (NP₂ サ) ヌガル。——「ヌガルA」

(11) NP₃ (NP₄ デ) ヌガル。——「ヌガルB」

NP₁ は主体(有情物)を、NP₂ は覆うもの(対象)を、NP₃ は主体(場所)を、NP₄ は原因を示す(注2)。

次に、「ウマル」について同様にみってみる。

(12) アノフト ヨグ ユキサ ウマル。(あの人はよく雪に足を取られる。)

(13) ドロサ ウマッテ ウゴゲネ。(泥に足がうまって動けない。)

(14) ナンダレデ(ナンダレ オギデ) エモ フトモ ユキサ ウマツタ。

(雪崩で家も人も雪にうもれた。)

(15) ジシツデ(ジシツ オギデ) タチキモ ナニモ ジメンサ ウマツタ。

(地震で立木も何もかもが地面にうまった。)

(16) ソノウジ ケツドノ アナモ ウマルベ。

(そのうち道路の穴もうまるだろう。)

(17) イゲ ゴミデ ウマル。(池がゴミでうまる。)

上の例から、「ウマル」は次の構文で用いられることがわかる。

(18) NP₁ (NP₂ サ) ウマル。——「ウマルA」

(19) NP₃ (NP₄ デ) ウマル。——「ウマルB」

NP₁ は主体 (有情物) を、NP₂ は覆うもの (対象) を、NP₃ は主体 (場所) を、NP₄ は原因を示す。

以上のように、「ウマル」「ヌガル」ともA・Bの2つの構文をとる。

本稿では、類義表現であるAの構文に絞って比較、考察することとする。

第2章 分析

第1節 主体

主体に立ちえるものの制限について考察する。まず、人間について検討する。

(20) ワダゲ アルグニ ヘダデ ユキサ ウマル。

(私だけ歩くのが下手で雪に足を取られる。)

(21) ワダゲ アルグニ ヘダデ ユキサ ヌガル。

(私だけ歩くのが下手で雪に足を取られる。)

(22) アノフト ヨグ ユキサ ウマル。(= (12))

(23) アノフト ヨグ ユキサ ヌガル。(= (6))

(20)~(23)で表わされる現象は、共通して雪に足がめり込み歩きにくいことである。ただし、(20)(22)で「ウマル」はめり込みが、(21)(23)で「ヌガル」は歩きにくさが強調されるように感じられる。

(24) アシ ウマル。(足がめりこむ。)

(25) ?アシ ヌガル。(足が取られる。)

(26) ?ヒンザ ウマル。(膝までめりこむ。)

(27) *ヒンザ ヌガル。

(28) テ ウマル。(手がめりこむ。)

(29) *テ ヌガル。

(30) アダマ ウマル。(頭がめりこむ。)

(31) *アダマ ヌガル。

身体部分については、「ヌガル」の主体としては足だけが立ちえる。「ヌガル」は人間が垂直に立ち、動くことが想定されているのではないか。(25)がやや不自然と思われる理由は、このような想定の下では、足がめり込むのは当然のことであり、過剰と感ずるからであろう。一方、「ウマル」については、体の先端部分からある程度覆われる状態では言える。頭については逆さになって雪などに突っ込んだ場合である。膝の場合は覆われる程

度が少な過ぎると感じられ、不自然である。

人間以外ではどうであろうか。

- (32) マ ユギサ ウマル。(馬が雪にうまる。)
- (33) マ ユギサ ヌガル。(馬が雪に足を取られる。)
- (34) サル ユギサ ウマル。(猿が雪にうまる。)
- (35) サル ユギサ ヌガル。(猿が雪に足を取られる。)
- (36) クルマ ドロサ ウマッテ ウゴガネ。(車が泥にうまって動かない。)
- (37) クルマ ドロサ ヌガッテ ウゴガネ。(車が泥に足を取られて動かない。)
- (38) エ ユギサ ウマル。(家が雪にうもれる。)
- (39) *エ ユギサ ヌガル。
- (40) ナンダレデ スギモ ユギサ ウマッテ。(雪崩で杉の木も雪にうもれた。)
- (41) *ナンダレデ スギモ ユギサ ヌガッテ。

「ヌガル」については、人間、動物、人間が運転する車はいえるが、他は言えないことから、人間の場合が第一義で、他は自力で動けるものという点からの比喩的な用法として扱ってよいと思われる。一方、「ウマル」については、「ヌガル」のような制限はない。特に、(32) (34)については死体であっても構わないことから、有形であることが制限となっている。

第2節 対象

雪のような柔らかいものの上にいると、それに接する身体(必然的に足)がめり込み、雪に身体が覆われる。「ウマル」「ヌガル」が、めり込み覆われることに関係することから、めり込み覆われえるものについて検討してみる。雪以外にどんなものがあるだろうか。気体・液体・固体と順に検討していく。例えば霧は、

- (42) *キリサ ウマル。
- (43) *キリサ ヌガル。

のように、気体は除外される。では、液体、例えば水はどうであろうか。

- (44) *ミズサ ウマル。
- (45) *ミズサ ヌガル。

液体は排除されるが、固体はどうであろうか。例えば、硬い一枚岩は、

- (46) *イジメイワサ ウマル。
- (47) *イジメイワサ ヌガル。

となり、表面が均質で硬く、めり込めないような固体も排除される。しかし、

- (48) スナサ ウマル。(砂にうずまる。)
- (49) スナサ ヌガル。(砂に足を取られる。)
- (50) ドロサ ウマル。(泥にうずまる。)
- (51) ドロサ ヌガル。(泥に足を取られる。)

のようなまとまりのある、粒・団塊状のもの、または、ゲル状のものならば共起できる。(49)では、その砂が水を含んでいるかどうかはあまり重要ではないが、確かに水を含んでいたほうがより自然ではある。同様に、落ち葉が厚く積もって腐食したもの、ゴミ(紙屑など)が厚く敷かれたものも共起する。このようなものへ身体部分がめり込むと、それら隙間なく覆われることにもなる。

(52) ドロダバ アマリ ヌガネバタテ ネバツジダバ ヌガッテ マイネ。
(泥ならあまり足を取られないけれど、粘土質の土だと足を取られて駄目だ。)

(53) オナジスナデモ ミズケ アルホジ ヌガル。
(同じ砂でも、水気・湿気があるほうが足を取られる。)

「ヌガル」については、めり込み覆われるものに、粘りがあるほうがより自然になる。

(54) ジャリサ ウマル。(砂利のなかにうずまる。)

(55) ?ジャリサ ヌガル。(砂利に足を取られる。)

(56) コイシサ ウマル。(小石のなかにうずまる。)

(57) ?コイシサ ヌガル。(小石に足を取られる。)

(55)(57)が不自然な文となるのは、想定される場面として、歩いている際に砂利や小石にめり込むことが、これらの(まとまりとしての)硬さから考えにくいからであろう。ただ、砂利がかなりの水気・流動性をもっている場合は、自然な文となる。

「ヌガル」は、めり込める(まとまりとしてとらえられる)ものとしか共起せず、地表より下方向へという制約がある。「ウマル」はこの制約を受けない。つまり、「ヌガル」は何かにめりこむ場面だけが想定されている。他方、「ウマル」は主体が何かに覆われさえすればよい。

(58) タマイシサ ウマル。(漬物石くらいの石のなかにうもれる。)

(59) *タマイシサ ヌガル。

(60) キサ ウマル。(多くの材木のなかにうずまる。)

(61) *キサ ヌガル。

(62) ヤマガラ オジデキタイワサ ウマル。(山から落ちてきた岩にうもれる。)

(63) *ヤマガラ オジデキタイワサ ヌガル。

(59)(61)(63)において、「ヌガル」は使えない。泥の場合は身体部分が隙間なく覆われるのに対して、岩の場合は身体部分が覆われることが不可能である。つまり、「ヌガル」には、密着して覆われることが必要なのである。砂利・砂は硬いが、流動性があるため身体部分に密着して覆うことができる。流動性は必然的にそのものの大きさ・硬さとかかわるのであるが、ここでは流動性という言葉に代表させる。「ヌガル」は流動性を有する、まとまりとしてとらえられるものと共起する。

(58)(60)(62)は、(何らかの力が加えられた結果として)石・木・岩に覆われている場面である。そして、同時に全体またはある部分まで覆われ姿が見えなくなっている状態で

ある。この時の石・木・岩は、まとまりとしてとらえたものであり、必然的に主体を覆い隠すことになる。つまり、「ウマル」については、そのものの一つ一つの大小には関わらないが、それらがまとまりとしてとらえられる固体（泥も含む）で、主体またはその一部を覆い隠せるものと共起する。

第3節 姿勢

(64) ウエガラ オジデキタジャリサ コシマンデ ウマツタ。

(上から落ちてきた砂利で腰までうもれた。)

(65) *ウエガラ オジデキタジャリサ コシマンデ ヌガツタ。

(66) ユギサ アダマ ウマツタ。(雪に頭がうもれた。)

(67) *ユギサ アダマ ヌガツタ。(注3)

(68) ドロサ テ ウマツテ ヌゲネ。(泥に手がうまって抜けない。)

(69) *ドロサ テ ヌガツテ ヌゲネ。

(70) アサイテラキャ ユギサ ウマツタ。(歩いていると、雪にうもれた。)

(71) アサイテラキャ ユギサ ヌガツタ。(歩いていると、雪に足を取られた。)

(64)は、うまっているときの姿勢は水平でも垂直でも構わない。(66)は、雪のなかに頭が突っ込んで首のあたりまでめり込んだ状態を表わす。(68)は泥のなかに手を突っ込んだが、その手が抜けないことを表わしている。つまり、「ウマル」姿勢がかかわらない。一方、「ヌガル」は歩くなどの垂直方向の姿勢に限られる。

第4節 自由度

覆われるといっても、その覆われる部分に制限はないのだろうか。

(72) ヒンザマンデ ウマル。(膝のあたりまでうもれる。)

(73) ヒンザマンデ ヌガル。(膝のあたりまでうもれる。)

(74) アダママンデ ウマル。(頭のところまでうもれる。)

(75) *アダママンデ ヌガル。

頭まで覆われた場合は、「ヌガル」とはいえない。では、どのあたりまでならいえるのであろうか。

(76) コシマンデ ウマル。(腰のあたりまでうもれる。)

(77) コシマンデ ヌガル。(腰のあたりまでうもれる。)

(78) ムネマンデ ウマル。(胸のあたりまでうもれる。)

(79) ?ムネマンデ ヌガル。(胸のあたりまでうもれる。)

(80) クンビマンデ ウマル。(首のあたりまでうもれる。)

(81) ??クンビマンデ ヌガル。

「ヌガル」と共起できる身体部分は、境は明確ではないが、腰までである。それより上部になるにつれて言いにいくくなる。では逆に、膝より下ではどうであらうか。

(82) ?アシクンビマンデ (ダゲ) ウマル。(足首のあたりまで/だけうもれる。)

- (83) ?アシクビマンデ (ダゲ) ヌガル。(足首のあたりまで/だけうもれる。)
 (84) *アシノサギマンデ (ダゲ) ウマル。
 (85) *アシノサギマンデ (ダゲ) ヌガル。

「ヌガル」は、覆われる部分が少なすぎても多すぎてもいけない。「ヌガル」は現象として地表より下方向にめり込むことだが、その程度は、ちょうど、歩く(立っている)のに若干の不自由さを伴うくらいでなければならない。このことは、第2節でのものの制約(流動性をもったものに隙間なく覆われるのだから、身体の一部は若干失われる)とも関係している。

「ウマル」は、ある程度以上覆われさえすればよい。すべて覆われてもかまわない。これは、「ウマル」が、「ヌガル」のような歩く(立っている)行為・意志という制約がないからである。このことが、「ウマル」が身体部分を主体としてとることとも関係するだろう(注4)。

第3章 まとめ

「ウマル」「ヌガル」の考察の結果を以下に記す。

「ウマル」——あるまとまりとしてとらえられるものに、一部または全部が覆われること。

「ヌガル」——流動性をともなった、あるまとまりとしてとらえられるものに、身体部分の一部が密着して覆われ、動きが妨げられること。

(注1) 以下カタカナ表記をするが、音韻論的カタカナ表記ではない。方言音を表すため、便宜的に使うものである。特殊音節については、1拍分の長さを持っていないので半角で表記する。

(注2) 津軽方言では、主格をあらわすガはない。

(注3) 逆立ちして、雪の中に首くらいまで突っ込んで進むという状況を設定すれば、かなり、不自然ながらもいえる。これは移動が妨げられる点だけを拡大したものと思われる。

(注4) 「ウマルA」については、主体に立つものが、有形に限られることから、結局は人間も、ものとして取り扱うべきと思われる。例えば、(14)のように家と人が同列であることから窺われる。

／参考文献／

国立国語研究所編 『動詞の意味・用法の記述的研究』 1972 秀英出版

(さとう ただゆき・青森県立大間高等学校教諭)

中国語における「同学」「学生」「学员」「同班」「同級」 「同窓」「校友」「同志」「同仁」「同胞」の意味記述

和 泉 喜 子

はじめに

私は現在東京都教育委員会の派遣教員として、大連外国語学院日語系の学生に日本語の授業を行なっている。(1994年9月より1年間の予定)この中国大陸はかつて、故中本正智先生が大変興味関心をむけられて、何度も実地調査された所である。またここで教えていると、日本では決して質問されない基礎語彙の細かな意味の違いについて説明することが多く、その度に懐かしい中本先生の意味論のゼミの風景が思い出される。

ここで取り上げる語彙は、学生のレポートの中から私自身が興味をもった語彙である。中国は今まさに大きく変わろうとしている。「開発開放」の名のもとにここ大連の地も大きく変貌しようとしている。ものの考え方も変わってきている。すべて新しいものが好まれる傾向が強い。言葉のうえでも以前は尊敬の意味の「老～」「大～」が好まれていたが今はより若く(新しく)みられる方を好むようだ。特に店員に対してどう呼んだらよいかわからない場合は、必ず日本語の「おねえさん」(お嬢さんという意味もある)にあたる語をつかい「おばさん」にあたる語はつかわない。年齢の高い中年以上の人に対して使うのは、日本語の意味を考えるとやや抵抗感があったが、大連の大きな店では普通のことのようにだ。店員に対してなど、以前ならばすべて「同志」という呼び掛けであった場面でも「同志」はあまりつかわれなくなっている。さらに、知らない人に道を尋ねる場合、女子大生のなかには日本語の「すいませんが」にあたる語をつかって声をかける者もいるという。人に対してあやまる言葉を簡単につかうことは以前には絶対になかったことのようにだ。

以下の意味分析は、教えている学生50名のレポートを参考にして一部の学生に内省をもとめて行なったものである。なお、中国語の用例で使用する漢字は、私の使っているワープロの機能上すべて日本で使用する漢字に置き換わっている。また、現在の日本語に無い漢字はここで使用できないために限られた用例になってしまっている。

1. 呼び掛けの場面につかわれる語彙の意味。

1. 1 呼称。道を尋ねる場面。

- (1) 同学 等一等。
- (2) 同志 等一等。
- (3) ??同胞 等一等。

10語のうち呼称として使われるのは「同学」「同志」である。「同胞」は若い人たちの間で冗談として使われている。人を呼ぶ場合の親しさの度合は「同学」「同志」－「(名前)同学」－「名前同志」「小(老)名前」と強くなるため「同志 等一等」といえば学生の間では冗談になる。本来「同志 請問一下～」となるべきである。呼び掛けられる対象者は「同学」は小学生から大学生までの幅広い意味の学生である。「同志」は大人であれば誰でもよい。しかし相手が大学生とわかる場合は「同志」ではなく「同学」がつかわれる。「同胞」は「海外同胞」としてつかわれる場合が多く、本来公式の場以外ではつかわれない語であり、呼称としては本来のつかわれかたと異なる。学生ではない人が学生に対して「同学」と呼び掛けることも含め、「同志」「同学」ともに呼ぶ側はどんな人でもよい。しかし大学生を中心に若い人は「同志」はほとんど使用しなくなっている。

1. 2 講演会や演説の場面

(4) ～好好 鍛練 身体

講演会や演説の場面で呼び掛けとして使用できないのは「同班」「同級」である。この2語は人を指す呼び掛けとしてつかわれることはない。学生において最も自然なのが「同学」であり「学生」「學員」という表現は講演側が先生ならばつかえるが互いに学生ではつかえない。「同仁」は教師など中国での知識人の中でつかわれることが多いが、今は古いイメージがあり、若い人はつかわなくなっている。

1. 3 掲示物における呼び掛け

「歓迎～」のような用例も1、2の用例同様に「同班」「同級」の2語は使用できない。また大学構内でよくみられるのは「歓迎新同学」であり「歓迎新学生」「歓迎新學員」という掲示は先生からの呼び掛けとなり、学生の間ではつかえない。また「新同胞」という言い方はない。

1. 4 呼び掛けの場面での意味の分析

「同学」・・・①勉強している人「学生さん」にあたる。しかし中国での学生は児童・生徒・学生すべてを指す意味である。②日本語の「～さん」にあたる。

「学生」・「學員」・・・教える側からの呼び掛けにかぎり使用できる。「学生さん」である。「學員」の場合は児童・生徒の意味は除かれる。

「同班」「同級」・・・呼び掛けの意味はない。しかし「同班同学」「同級同学」の熟語の形で呼び掛け語となる。

「同窓」「校友」・・・同じ学校で学んだことのある人の意である。同じ意味であるがそれぞれ「同窓会」「校友会」という言い方をする会がある。またその場合もほとんど同学をつかっており、呼び掛けとしては一般的ではない。

「同志」・・・大人の人の意。1980年頃までは呼び掛け語として最もよく使用されていたが、今は特に学生では金を借りるなど何か頼むときにつかたり、冗談としてつかうことが多く、特別に親しい人に対する表現である。

「同仁」・・・同じ職場で働く人の意。多くは位の上のものから下のものに対してつかわれる。まれには学生の間でも冗談として「同仁」をつかうこともあるようだが、学生の間ではこの語をまったく知らないものもいて日常の使用語ではない。

「同胞」・・・同じ民族、同じ国民の意。公式の演説など特殊な場面でのみつかわれる。しかし学生の間ではバスに乗るとき「女同胞」と冗談で呼び掛けることもある。兄弟などには使わない。

2 「同学」「学生」「学员」の意味

2. 1 人に紹介する場面。

- (5) 他 和 我 是 同 学
- (6) 他 和 我 是 学 生
- (7) 他 和 我 是 学 员
- (8) 他 是 我 的 同 学
- (9) 他 是 我 的 学 生
- (10) × 他 是 我 的 学 员
- (11) 他 是 我 的 同 班 同 学
- (12) × 他 是 我 的 同 班 学 生
- (13) ? 他 是 我 的 同 班 学 员

(5)の意味は彼と私はクラスメートまたは同じ学校の人だ。(6)(7)は彼と私は学校で学ぶ人だ。(8)は彼は私のクラスメートまたは同じ学校の人だ。(9)は彼は私の「教え子」である。例えば家庭教師が教えている子に対しても使用できる。

- (14) 那 是 男 同 学 的 宿 舍
- (15) 他 是 我 校 同 学 的 代 表
- (16) ? 同 学 的 数 目 是 八 十 人

(14)は「男学生宿舍」と同じ意味に使用される。(15)で「他是我校学生代表」といえばごく自然な表現である。これに対して「同学的代表」は学生のみがつかい、教える側からは言えない。(16)の用例は自然なつかい方ではない。

2. 2 意味と用法

「同学」・・・人に紹介する場合の意味は、自分と同じ学校で勉強する人、同じ学校と一緒に勉強したことのある人。自分との関係を指す。

「学生」・・・先生について勉強している人。身分。先輩に対して謙遜して自分を指す場合もある。

「学员」・・・必ず大人で専門的な学校で勉強して、そこに属しているという立場。直接的には人を指さない。

3 「同班」「同級」「同窓」「校友」の意味

3. 1 人に紹介する場面

- (17) ×他 是 我的 同班
- (18) ×他 是 我的 同級
- (19) 他 是 我的 同窓
- (20) 他 是 我的 校友
- (21) 他 和 我 是 同班
- (22) 他 和 我 是 同級
- (23) 他 和 我 是 同窓
- (24) 他 和 我 是 校友

(17) (18) はいずれも「同班同学」「同級同学」と言い換えれば可能となる。(23) は親しい人という意が含まれるが(24) は同じ学校であればほとんど知らない人でもつかうことができる。

3. 2 意味と用法

「同班」・・・同じクラス。直接人を指さず、「クラスメート」の意ではつかえない。

「同級」・・・同じ学年。クラスや専攻などは違ってよい。直接には「同じ学年の人」を指さない。

「同窓」・・・同じ学校に通ったことのある友人。または同じ学校を卒業した人。「同窓好友」といえば最も親しい友人を指す。同じ学校で学んだ年齢的にも近い人。普通は卒業してからつかうが、在校中に使ってもよい。学年・学部・専攻など違っていてもよいが必ず在校中に親しくなった人。「同窓会」は卒業した者の集まり。ふるいイメージをもつ語である。

「校友」・・・同じ学校に在籍したことのある人。対象者が卒業生であれば、一方が在校生でもよい。「校友会」としてよくつかわれる。

4 「同志」「同仁」「同胞」の意味

4. 1 人に紹介する場面

- (25) ×他 是 我的 同志
- (26) ?他 是 我的 同仁
- (27) 他 是 我的 同胞
- (28) ?他 和 我 是 同志
- (29) ?他 和 我 是 同仁
- (30) 他 和 我 是 同胞

(25) の用例は古い言い方では「我」を複数形にして、同じ思想を持つ者どうしでつかわれていた。(26) (28) (29) は正式な場面では使用できず、からかう相手に対してや一緒にいたずらをするような特別の場合の相手に対してつかわれる。(27) (30) は表現は可能であるが、日常生活の中でつかわれることはほとんどない。

4. 2 意味と用法

「同志」・・・志を同じくする人。「革命同志」としてよく使われたことばであるため、今は政治的な会議、大会の場面などでよくつかわれているが他の場面ではあまりつかわれない。

「同仁」・・・同じ職業の人。若い人はあまりつかわなくなっている。

「同胞」・・・同じ民族、国民の意。現在「海外同胞」「台湾同胞」「香港同胞」としてつかわれる。若い人たちの間では冗談としてつかう。

5 中国における辞書の意味

参考のため一般的によくでまわっている辞書として「現代漢語詞典」(商務印書館)を選び、その記述を次に記す。(＊は量詞↑である)

「同学」・・・在同一＊学校学習 ①在同一＊学習的人 ②称呼学生

「学生」・・・①在学校讀書的人 ②向老師或前輩學習的人

「學員」・・・一般指在高等学校、中学、小学校以外的学校或訓練班學習的人

「同班」・・・①同在一＊班里 ②同一＊班級的同學

「同級」・・・記述なし

「同窓」・・・①同在一＊学校學習 ②同在一＊学校學習的人

「校友」・・・学校的師生称在本校卒業的人、有時世包括曾在本校任教職員的人

「同志」・・・①為共同的理想、事業而奮鬥的人、得指同一＊政党的成員。②某些国家人民之間的称呼

「同仁・同人」・・・称在同一単位工作的人或同行業的人
「同胞」・・・①同父母所生的 ②同一*国家或民族的人

6 10語の意味記述

以上1～4の分析から得た意味をまとめる。

- 「同学」・・・①「学校で学んでいる人」という意味の呼称。「(名前)同学」の場合は「～さん」の意。②自分と同じ学校で学んでいる人、または学んだことのある人の意。
- 「学生」・・・学校で学んでいるという身分。また教える側の先生に対応する教えられる側の人の意味。
- 「學員」・・・大人で専門的な学校で学んでいて、そこに属しているという立場を指す。
- 「同班」・・・同じクラス。
- 「同級」・・・同じ学年。
- 「同窓」・・・同じ学校で学んだことのある知人。
- 「校友」・・・同じ学校で学んだことのある人。
- 「同志」・・・①「大人の人」という意味の呼称。「(名前)同志」の場合は「～さん」の意。②仲間。志を同じくする人。
- 「同仁」・・・同じ職業の人。
- 「同胞」・・・同じ民族。同じ国民の意。その意を強調するときにつかう。

おわりに

外国生活をして、何より興味関心をもつのは「ことば」の意味の違いである。ある学生が「先生、大根は4種類あります。1つは外側も白くて中も白いもの。外側が緑がかっていて中が白いもの。外側が緑がかっていて中が赤いもの。外側が赤くて、中が赤いものです。」と説明してくれた。確認すると4つめは日本の人参にあたる。中国で人参といえば朝鮮人参をさし、別であるという。それにしても日本人が大好きなカレーライスには中国の大根が入っているのかと思うと実におかしい。これは方言のようであり、中国普通語では日本の「大根」「人参」はことばのうえで区別しているようであるが、いずれにしても同じ漢字「人参」ということばの意味内容は日本と中国で違っている。また、上にあげた10語にはそれぞれまた別の類義語があり、その違いを説明するのは実に難しい。今後の課題としたい。

(いずみ よしこ 大連外国語学院日語専攻・東京都立国立高等学校)